

川崎市総合計画有識者会議第2回ラウンドテーブル
議事録

日 時 平成26年11月27日(木) 18:00～20:00

会 場 川崎市役所 第4庁舎 第3会議室

出席者

委 員 秋山委員、出石委員(副座長)、垣内委員、中井委員(欠席)、平尾委員、涌井委員(座長)
ゲストアドバイザー 須藤シンジ氏(NPO法人ピープルデザイン研究所代表理事)
市 側 福田市長、唐仁原都市経営部長、袖山自治推進部長、久万企画調整課長、
萩原健康福祉局障害保健福祉部長

議 題 開会

市長あいさつ

出席者紹介

1 テーマ「意識をデザインする」

ゲストアドバイザー 須藤シンジ氏(NPO法人ピープルデザイン研究所代表理事)

2 市の現状と課題

「ピープルデザインの考え方を活用したダイバーシティのまちづくりの推進について」

3 その他(次回会議等の開催等)

公開及び非公開の別 公開

傍聴者 2名(報道関係者)

議事

開会

(事務局)

ただいまから川崎市総合計画有識者会議の第2回ラウンドテーブルを開催させていただきます。私は総合企画局企画調整課長の久万と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本日のラウンドテーブルも先般の有識者会議と同様に公開とさせていただきますので、マスコミの取材等を許可しておりますことをあらかじめご了解いただければと存じます。あわせて、本会議の支援ということで民間会社の方もご同席いただいておりますので、ご了承いただきたいと存じます。

それでは、最初に、お手元にお配りしている資料の確認からさせていただきます。

●第2回ラウンドテーブル 次第

- 委員名簿
- 座席表
- 川崎市総合計画有識者会議第1回会議及び第1回ラウンドテーブル 開催結果概要
- 須藤シンジ氏略歴
- 資料1 「2020年、渋谷。超福祉の日常を体験しよう展」チラシ
- 資料2 ピープルデザインの考え方を活用したダイバーシティのまちづくりの推進について
- 資料3 有識者会議・市民検討会議の流れ（案）

あわせて、追加資料として、ピープルデザインとの協定書を机上に置かせていただいております。第1回全体会と第1回ラウンドテーブルの議事録の内容につきましては、委員の皆さまに個別に確認させていただいておりますけれども、このたび、開催結果概要を添付してございますので、後ほどご確認いただければと思います。

また、本日のゲストアドバイザー須藤シンジ様の略歴につきましても配布させていただきました。2012年にNPOピープルデザイン研究所を設立し、代表理事を務めていらっしゃいます。人々が持つ「意識のバリア」や従来の福祉のあり方をファッションとデザインの力で変えていく取組を行っているところでございます。資料の説明につきましては以上でございます。

市長あいさつ

（事務局）

会議に先立ちまして、福田市長から皆様にご挨拶を申し上げたいと存じますので、市長、よろしくお願いたします。

（福田市長）

お忙しい中お集まりいただきありがとうございました。第2回目のラウンドテーブルということで、ピープルデザインの須藤さんにお越しいただきました。須藤さんのお話を何度かうかがったのですが、本当に感銘を受けました。目からウロコが落ちるような話がとても多く、人口の約6%が何らかの障害を持っている方であり、その多くが健常者と別に暮らしているのですが、これを混ざり合わせることがいかに大切かに気づかせていただきました。そこで、今年7月にピープルデザイン研究所と川崎市が協定を結びました。NPO法人と協定を締結するのは初めてのことです。ピープルデザインの考え方を広く川崎市に取り込もうと考えています。6年後の東京オリンピック、その後の市制100周年には、すでに混ざり合った状態になっていなければならないと思っています。今日もまた貴重なお話をうかがえるものと思っています。よろしくお願いたします。

出席者紹介

（事務局）

どうもありがとうございました。それでは、本日の出席者の方々と市側の参加者をあわせてご紹介させていただきたいと存じます。（中井委員は欠席）

<事務局より出席者をご紹介>

以上で、委員及び市側参加者の紹介を終了させていただきます。なお、本日のラウンドテーブ

ルも重要な会議でございますので、内容の重複や明らかな誤りを除きまして全て記録させていただきまして、後日各委員の承認を経て公開させていただきたいと存じますので、ご理解のほどよろしくお願いたします。それでは、これからの進行を座長の涌井先生をお願いしたいと存じます。よろしくお願いたします。

1 テーマ「意識をデザインする」

(座長)

ピープルデザインについては、これからコミュニティデザインの時代という中で、非常に独特な実践をされているということに敬意を表したいと思います。さっそく勉強させていただきたいと思いますので、是非お話をさせていただきたいと思います。よろしくお願いたします。

(須藤ゲストアドバイザー)

改めまして須藤シンジと申します。今日このような場所にお声掛けいただき、大変ありがとうございます。私は川崎市にかなり縁が深く、小学校4年生の時に、現在の宮前区である宮前平に引っ越して参りまして、住民として40年川崎市で生活しております。また、地元の県立高校を出て、大学生を過ぎた頃から、主に渋谷を拠点にバブルの時代を謳歌しながら今日に至ったわけでございます。住みやすい場所として終の棲家という気持ちで、現在も宮前区に妻1人息子3人の家族で在住しております。

今晚もピープルデザイン並びにこの考え方を市政の未来、また川崎市の未来に活かしたいと思う中で、日々実行しております様々なアクションが生まれる背景を含め、幾ばくかの説明をさせていただけたらと思います。ちょうど今年で20歳になる次男は、今から20年前に誕生いたしました。へその緒が首に巻きつき、酸素が入らない出生時仮死という状態で生まれ2歳の時に重度の脳性麻痺であることがわかり、障害者手帳を授かりました。当時私はサラリーマンで、バブル経済の時代背景もあり、事業企画や宣伝、あるいはバイヤーとかなり華やかな種類の仕事をしておりました。しかし、福祉の行政サービスを受ける当事者として、当時の福祉の環境並びにそこから見える息子の将来を見回した時に、正直申し上げて明るい未来が抱けませんでした。当時バリアフリーはもちろんありましたが、1991年のバリアフリーの法律を含め、ユニバーサルデザインという言葉も台頭してきた社会背景にありました。しかしながら、当時の障害者年金とその後想定される療育センターでのリハビリテーション、ならびに障害者の専門学校といった人生を見据えると、経済的な視点以外で、彼が生きていける未来はあるのだろうかと思い、暗澹たる気持ちになりました。

その頃、海外の先進諸国に仕事柄訪れる機会が多かったのですが、非常によく見かける風景がありました。例えばイタリアあるいはフランスでは、道は石畳でそもそもデコボコです。それに対して大きな国家的な税金をかけて平らにしているかと思えば、むしろコストをかけてその歴史的な装置を維持しようとしています。従って物理的にはデコボコだらけにも関わらず、イタリアにおいては、お洒落をした中年男女を含め、車いす利用者が普通に1人で、必ずしもローステップではない路面電車を利用しています。そして乗り合わせたお元気な老人が中学生に「君、そこ持とうか」と声をかけ、その車いすの方を持ち上げる。当たり前のようにそういったシーンが過

ぎていくのです。振り返って日本はと言いますと、駅員さんが3人がかりで、駅の最後尾から「只今搬送終了、ピー。」みたいな感じで対応されています。果たしてこれはどちらが良いかといった時に、もしかしたらハードや社会的インフラよりも、人の動きや具体的なアクションで概ねの課題は解決できるのではないかと思います。仮に我が息子が、金銭的に苦しんだとしても、兄ちゃんと弟に若干のおかずを貰いながら、街に1人で出ていくモチベーションがあり、街ゆく人たちが「持ちましようか」、「困っていませんか」と声をかけられ、それが当たり前であるような未来が実現していれば、それは本当の意味での自立に繋がるのではないかと考えました。前置きが長くて本当に申し訳ないのですが、痛切に感じたのは、どうやらバリアは、物理的なハードではなく、人々の意識の中にあるということです。ここでいう人々というのは、我々健常者のみならず、それまでの障害者に対する行政サービスをお受けになった人、ハンディキャップを持った方々、そしてそのご家族です。リハビリテーションに通いながら、周りにいらっしゃる同じような境遇のご家族とお話をしながらも、皆に狂信的なバリアがあるということを感じてきました。こうしたバリアに対して、そういった未来をつくろうと強く拳を挙げるより、当時私が持っていた職能を使って、何か未来づくりに貢献できないかと思ったのがこの活動のきっかけです。

その活動を始めたのが12年前です。市長からご説明いただいています。当時も人口の概ね6%が何らかの障害を持っているとされていました。残り94%の障害者の親も含めた健常者側の意識をまず大きく変えることが大事ではないかと思いました。それを誰に対して伝えていこうかと考えた時に、1995年までは法律上障害者は人ではなかったわけです。母体保護法や措置法、日本の歴史の中で、法規に関するいくつかのルールが積み重なっていますが、良くも悪くも、人として認められたのが自立支援に関する法律が正式に施行された1996年以降です。私の幼少期を振り返っても、確か一般学級と当時は特殊学級と呼ばれており、分かれていました。どうも分かれていることそのものに、私たちが良い悪いではなく、慣れてしまっており、接触頻度が著しく少ないことによって、純粹に、障害にまつわる種類とか症状に無知なのではないか、と思ひ至りました。

一言に障害といっても、身体、知的、精神とそれぞれのディテールによりますし、あるいは同じ度数であっても10人寄れば10通りの違いがあり、非常に難しいところでもあります。当時重度障害2級で生まれ、現在身体障害6級、知的障害B1クラス、IQ概ね40から45くらいの次男を取り巻く家族の目線の範囲の中で語る障害者、というように定義をさせていただくならば、健常者の人たち、できればこれから父となり母となる人たちの意識にリーチして、彼ら彼女たちの子育ての空間の中で、ある意味違っていることに対して聞くという行為を促進させ、あるいはみんな席を譲りたいと思っはいるのにもじもじしてできない、というもじもじ感、そこをおして席を譲り、持ちましようかと言える、そういった行動規範をもう一回開花させられないものかと思ひます。これは端的に言いますと、思いやりだと思います。私たちが祖父母からもさんざん言われてきました、思いやりのある子どもになりなさいと。おそらく日本人は、そもそもある「人に思いを馳せる」という想像力を今一度意思を持って開花させ、それをメッセージとして健常者たる若き男女に伝えることが大事です。

彼らが素直にカッコいいとかカワイイとか、そういう文脈で情報にリーチしてもらうために、ファッションあるいはデザインなど、いわば厚生労働省よりは経済産業省の領域で売上を上げて

いくようなマーケットで展開していく方法を選びました。活動 12 年にして、現在取り組んでくださっている世界のトップクリエイターは 128 名となります。非常に有名な海外ブランドのデザイナーも多く含まれますが、その彼らと共にファッションショーを通じてメッセージをしたため、あくまでも一般マーケットで売れるモノづくりというところからこの活動を始めました。ピープルデザインの関連事業直近事例をお手もとのパンフレット等々に入れていただいていると思います。ちょっと遠回りのようですが、これは非常に川崎と関係の深いことなので若干のご説明でお時間をとらせることお許しください。

従来の福祉では、かつてデンマークで生まれたノーマライゼーションという概念のもとで、マイナスからゼロに引き上げようという発想でした。一方、私たちが提供する文脈は、そもそもみんなゼロ以上の所に立っているということです。背が高いか、足があるか、学校の成績が良いか悪いかの若干の違いであって、違って良い彼らが混ざっていながら、ゼロ以上のはるか高みを目指していくという矢印を持っている。マイナスからゼロへの矢印が比較的従来の福祉にまつわる印象だったとするならば、ゼロ以上の高みの憧れにいたる矢印を私たちは超福祉と呼んでいます。

その超福祉の日常を体験しようということで、11 月 12 日から 18 日まで渋谷のヒカリエで従来の福祉機器と、福祉機器を同情やある種かわいそうという感覚を一切排除して、これ凄い、カワイイ、欲しいというような文脈でメッセージすることを目的に、初めての超福祉の機器展を開催しました。このイベントは日本財団にご支援いただきながら慶應義塾大学大学院のメディアデザイン研究科ならびに渋谷区の共催でスタートしたものです。これをきっかけに世界的に有名な都市として、この場合は渋谷ですが、そこを 1 つのショーケースとして混ざり合うことの当たり前感を日本が独自に持っているポップカルチャーと言われる漫画ですとかアニメも含めて総動員し、従来の福祉機器、乗りたくないという私も思ってしまうあの車いすを、できれば今すぐにでも乗りたいというような文脈の中で、内需のマーケットとして作っていくという狙いも含め展開しました。

ここに象徴されるいくつかの絵柄が、今般川崎で取り組んでいることにも繋がっていくのですが、ちなみに（資料 1）右下の三輪自転車のようなものですが、ご存じのように四肢麻痺の方が移動に使うハンドバイクや三輪自転車のようなもので、有名なインテリアデザイナーがシート形状をデザインして、電動アシストの機能をつけて、自転車の次にはこれに乗ってみたいねというような、街乗りモビリティというような形で提案をしています。そして左下の丸いタイヤの不思議な乗り物、バッドマンみたいな漫画と一緒に描かれていますが、これはセグウェイという立ち乗りの二輪歩行器がありますが、イタリアの脊損で下半身が麻痺になった人物がこれからも彼女と手をつないで浜辺を歩きたいという思いから、今ある車いすはダサいし、できれば乗りたくないということで、セグウェイを自身で改造し、砂浜も雪道もガシガシ走っていける、言ってみればジャイロセンサの駆動を利用した車いすです。これをご多分に漏れず世界的に SNS 等々で流布した結果、世界中からオーダーが入り、現状一台概ね 300 万円くらいで販売が継続されています。こういったものを、従来の車いすという気の毒な方々が使う医療用具という印象から、できれば乗ってみたいというようなモビリティにイメージを大きく、すなわち心のバリアを大きく超えた提案ができたのではないかなと実感しております。

土日を含めて試乗会を開催しましたが、お子さんを含めたご家族連れ、全国地方自治体、NHK

の首都圏ニュースと7時のニュース、ニュースウォッチ9では急遽8分の特集をくれたということもあり、最終週の末にはその放送をご覧になった台湾、中国、カナダの事業家、実業家、開発者らが訪れました。ちなみに、リハビリに関する独立行政法人の名誉顧問の皆様まで足をお運びになり、一部官僚のみなさんもいらっしゃるぐらい、ヒカリエ始まって以来の集客を得るまでになったようです。

なぜこのような説明を申し上げているかと言いますと、意識のバリアをフリーにして、みんな混ざり合う社会を創ろうという提言を、従来、小さなファッション商品で様々なファッションの触発をして、一般ユーザーに展開してきたわけですが、まだ弱いということで、これを要は、面を通じて広く住民・市民の皆さんに訴えかける方法はないだろうかと考えました。

折しも東京オリンピック・パラリンピックが6年後に控えている中で、あまり嬉しくないニュースも新聞で目にしております。ご存じのように社会保障費が現在108兆円を超え、少子高齢化で言えば、ある日突然ずどんとなくなる滝に向かう川に浮かぶいかだに我々が乗っているという、一番端っこの危機感を前向きに捉えるべきだろうと思います。社会的なコストとして目されていた社会保障の領域を、良い意味で経済産業の領域で持ち上げられないだろうかと思えます。昨今の経済政策もなかなか内需が活性化しません。この領域にあって内需を活性化する策としてこの発想が持ち込めれば、もしかするとそこでの大きなインパクト、言ってみればコストではなくベネフィット、セールス、売上がこの大きな社会コストを凌駕するぐらいのウエイトになるかもしれないのです。

そもそも6%というマイノリティの父親としてはじまったこの活動ですが、高齢者に目を向ければ、現在25%あるいは30%に迫っています。この高齢者をマーケットと捉え、患者ではなくカスタマーと捉えた時に、大きなパラダイムシフトがあり得るのではないかと思います。そこをお見せすることはもしかしたら、日本のみならず少子高齢化の最先端を走っている我が国が、世界に見せられる1つのロールモデルになり得るのではないかと考えています。今般のイメージは、テクノロジーのイノベーションを東京のど真ん中の渋谷の商業ビルでお見せしながら、我々の本意である意識や心のバリアを解放し、フリーにし、この意識のイノベーションを実現する取組なのです。これを来年以降、川崎に我田引水していきたいと思っております。

本日の新聞にもありましたが、サイバーダイন株式会社の山海先生には、この「超福祉」のビジュアルを半年前からアプローチしておったのですが、なかなかお忙しくてお話できませんでした。しかし、先日のG7の認知症のサミットで一緒する機会がありまして、「先生、こういうことをやっています。面白いことになります」と申し上げて、10m 一緒にエスカレーター移動する間にアポイントをお願いしました。サイバーダインの魅力である医療器具が、エンターテイメントの道具になるかもしれないということ、少し先出しですが、山海先生にご提案する予定です。

ちなみに冒頭に市長からご案内を頂戴しましたが、7月15日に川崎市と協定を結びまして、その時、その後今年何をするかについては、お手元にご用意いただいておりますA3の資料の各論の中で、文字で表現させていただきました。その中でいくつか象徴的なところを、私は文系かつアナログなものですから、紙のプリントアウトで恐縮ですが是非皆さんと直観的にお話いただきながらご協力いただきたいと思います。

混ざり合う場面ですが、文字通り心のバリアフリーをクリエイティブに実現する方法として、ピープルデザインという概念を立ち上げました。どのようなことかを一般市民の皆さん、川崎市においては145万人の皆さんに津々浦々で体感していただくということで、底流には障害者の社会参画、障害者雇用を終期のイメージとしております。突然資本力のない私たちがそれを声高に叫ぶのは僭越なので、障害者の就労体験という要素を全てイベントのエンジンに据えて展開をして参りました。

直近で7月15日以降を開催順に簡単にご案内すると、ラゾーナにプラザソルという300人ほど入る大きなホールがあります。そこであるハンディキャッパーが出てくる「グレートデイズ」という映画の試写会を配給会社のGAGAさんとタイアップして組みました。ここでは映画を見ていただくと同時に、パラリンピアンのエース山田拓朗君、左腕の肘から先が欠損しているのですが、ロンドンパラリンピックでは世界4位、直近のアジアパラリンピックでは1位、その前のパンパシフィックでは世界3位と、間違いなくリオでメダル圏内に入ってくる人物、そして右側のお兄ちゃんは、いろいろなパフォーマー達をマネージメントしてTVコマーシャルにするマネージメント会社の社長ですが、かなり深刻な難聴で、両耳に補聴器を入れています。その補聴器にデコレーションを施して、よく見ますと宇宙人みたいなキラキラ光る耳元が「何それ」っていう男です。ハンディを持っているけれど負けてないよという彼らを、頑張ろうではなくて、なぜそのハンディを負ったのか、痛かったのか痛くなかったのか、触っていいかと。通常我々、特に51歳の私においては、しつけ教育の中でそんなことは聞いてはいけませんよと教えられましたが、そういうテーマをあえて聞いてみると、聞いていいのです。「いやーこれは事故で」とか「生まれつきなくて」、「ここが柔らかいから衣装をつけてもそこが痛いんだよ」とか、「泳ぐ時はどうやって泳ぐのですか」と。「みんな見たことないだろう。是非YouTubeで見てみてよ。早いよ。」というような、従来のタブーすなわち無知、無知の裏側には恐怖が潜みますが、この恐怖こそがスティグマと呼ばれる心のバリアの源泉なのではないかと思えます。

したがって、むしろそれを口に出して、無知を知に変えることによって、その概ねの心のバリアは解放されるのではないかと思います。そういったことを、映画と川崎ラゾーナと試写会というちょっとワクワクする土俵の上で、軽やかに展開していくということを行っています。実際会場は300名弱の皆さんにお越しいただいて満員になりました。ハンディキャップをもった障害者の方々をイベントに招待するというのはよくありがちですが、もてなされるのではなく、もてなす側にまわっていただくということで、現在イベントのたびにスタッフとして働いていただいています。スタッフとして選定する時の参加人数は、障害者の人口比に合わせて概ね全体の6%を目指します。

一番象徴的だったのは、先日11万人という日本最大のハロウィンのパレードがありましたが、あの時に私どもは117人のピープルデザインのボランティアのスタッフを組織し、内44人が地元の知的ならびに精神障害者の皆さんに、こんなユニフォームを着て会場案内をしてもらいました。よくお兄さんたちがこういうものを着てコンサート会場や大きなイベント会場で生き生きと働いていますが、我々も学生の時はあぁいったバイトを一度やってみたいと思ったものです。そういった見かけが非常に重要です。おしゃれなユニフォームを用意して、44名の知的・精神障害者の方々を含む117名のボランティアスタッフが、主には25日のキッズパレードに、そして26

日の本パレードの時に、パレードの最後尾でゴミ拾いのスタッフとして、道行くパレードが終わった後には街が綺麗になるという役割を演じていただきました。様々な場面においてパレードという憧れの日本一大きなお祭りの運営スタッフとして働いていただきました。

また、フロンターレとタイアップして、等々力競技場でのサッカーの試合の時に、同じく全スタッフ概ね 100 名、その 6%相当とミニマム 6 名の枠を私どもにお預けいただき、今日ここにいらっしゃいます健康福祉局の萩原部長の部隊のお力をお借りして、地元の様々な福祉施設に通う彼らに、どうだろう、やってみないかと声をかけまして、今年 2 企画を実施しました。開催前についてはシートの清掃、そして入口でよく配られるチラシの準備、なにしろドーンと開いた時に 1 万人を超えるお客様が来られるそのスケール感たるもの、どういうことなのかと、手を抜くなよと叱咤激励をしました。

チラシの配布は、様々な形で行っており、直近では市民マラソンの日も多摩川沿いの給水スペースでご活躍いただきました。富士通フロンティアーズの、アメリカンフットボールの試合の時に同じくスタッフとして参加いただいたりもしました。

富士通レッドウェーブの時には観客が 4 千人で、そこに延べ 12 人のハンディキャッパーの方々がスタッフとしておりました。試合が始まりますと、親御さん皆さんは試合を見ますので、未就学児童の小さいお子さんがチョコチョコ通路部分を走り回ります。このお子さんたちを遊ばせる係をやってもらうのはどうだろうということで、当日ご相談申し上げたら、おそらく過去の感覚では、特に企業スポーツの感覚ではそこまで任せるのは不安だと思うのですが、富士通さんは懐が深く、よくご理解いただき、良いですねと言っていただきました。みんなで遊ぼうよと、未就学児童たちの遊ばせ係を知的精神の子たちが展開し、実に和やかに、ある種機敏に、一人一人の子どもたちをケアする彼らを見て、障害者施設の職員の皆さんが驚かれています。彼ら彼女たちの可能性を狭めていたのはどうやら私たちの理解で、実は出来ることはこんなにあるのだというお声を頂戴いたしました。延べ 8 件以上の企画を今年 7 月以降本日まで開催しているのですが、参加された知的・精神の障害者の実数は現在 100 名を超えており、来年ではマネタイズも含めてどのように協力していくかという準備を、計画を組み立てるというフェーズの中で現在準備しているところです。

モノ・マチづくり、コトづくり、ヒトづくり、シゴトづくりと大きく 4 つのテーマを今般協定締結に際してご提案させていただいております。コトづくりの中でいわば社会的弱者と言われる彼らが、仕事というテーマで社会に出て行きます。出て行っても裏で汚れた服装でゴミを拾うというのではなく、ワクワクしてしまうような絵と、フロンターレなどの仕事をしていることによる友達からの敬意、憧れをもって見つめられるような場所で、もてなされる側ではなく、もてなす側として参画していくのです。このようなことは、現在一部教育機関からもご興味持っていただいております、小中高と比較的これからを司る思考の柔軟い職員ならびに大学生の彼らにおいては、本来で言えば社会学的なテーマではあるのですが、経済的なソーシャルイノベーションの大きなバネになるのではないかという知見から、今年、国立滋賀大学、2 年前までは慶應義塾大学商学部、それからヨーロッパのデルフト工科大学においては、MBA のマスターコースの先進的なデザインのコンセプトという切り口の中でピープルデザインも授業を行っています。私も向こうに行く時間がかなり少なくなりましたので、1、2 年はごめんなさいということなのですが、ま

た来年からそれを指導する準備をしていきたいと思っています。

あるいは南半球ではニュージーランドのワイカト大学では、教授・准教授のステータスではないのですが、ゲスト・レクチャーという立場の中で、2週間の集中授業のご依頼をいただいています。どうもこの切り口は、日本のみならず世界的にもユニークであることは間違いないようで、これを今まで通りと言いますか、更に我がまち川崎市発日本の未来行きという矢印の中で、具体的な数字に落とせる定量として展開していくという課題に来年以降は取り組んで参りたいと思います。確実に文系思いつき系の展開なので、これを定量に置き換えるべく、先の超福祉展のイベントを慶應義塾大学大学院の皆様とも一緒にやっつけようということになっています。もしご縁がありましたら今日お集まりの先生方を含めて、何か1つまちを立ち上げていくロールモデルの一助として、定性の定量化にご縁を持たたら大変光栄に思っております。

最後に繰り返しになりますが、私が子どもの頃は、眼鏡は眼医者さんで処方される医療用具で、学校の健康診断で近眼が疑われまして眼医者さんに行きました。小学校4年生の時にそれ受け取った時に思いました。「一生モテないな」と。翌日からついたあだ名が「がり勉君」で、当時はガラス製のレンズしかなかったので、うずを巻いており、漫画のキャラクターで、文字通りがり勉君で一生終わったなと思ったのです。今思えば、これこそがある種の心のバリアでした。

それが今現在どうでしょうか。だて眼鏡も含め、着替えるファッションのアイウェアという文脈に眼鏡が置かれたと言います。近眼の人が感じると思われるステイグマは皆無に等しいのではないかなと思います。そういった憧れやカワイイ・カッコいい・素敵と言える形容詞が、かわいそうで気の毒だという形容詞にとって代わる未来というものを、少なくとも現在小さな3法人の代表を勤めておりますが、このピープルデザイン研究所というNPOのエンジンを使って、地域と川崎、そして我が国の未来に役に立てられればと思っております。純粹に1人の障害児の父親として始まった活動ではありますが、現在世界のトップクリエイター達、ならびに国内外の一部が大学の関係者、あるいは企業の皆さまからまだ大きく注目は集まっていますが、これを川崎発の未来行きにできたらと強く思っております。私からの説明は以上です。ありがとうございました。

(座長)

ありがとうございました。大変刺激的であり、感動的なお話を頂戴いたしました。こちらについて委員の方々から、質問なりご意見がございましたら、是非よろしくお願いいいたします。

(座長)

渋谷区というまちは非常に面白いまちで、今までとまったく発想を変えて、サブカルチャーを重要視し、ある種のインキュベーションの場所でもあります。たとえば、まっ暗闇の中で自分が思いやりを感じるという、ダイアログ・イン・ザ・ダークというものがありますが、ある住宅メーカーがそれをベースにした住宅デザイン展開をしようとしています。一方では、セグウェイなども、トヨタがウィングレットという様々なシリーズを8種類ぐらい作り始めています。いわゆるパーソナルモビリティという方向にいろいろモノが変わっていています。

私はウィーンから帰ってきたばかりなのですが、欧州では、歩くことをベースとした社会づくりが重要だという考えから、駅勢圏から2キロ圏内ではほとんど4車線を2車線にしています。駐車場がないため車がオーバーフローしてしまうので、むしろ駐車場をつくらず、駐車場がない

からトラムを利用する、という逆の現象を起こしています。コンパクトシティという名ばかりではなく、もっと濃密な人間空間を作ろうという動きが出てきています。何と言っても、日本がクリエイティブシティという方向になるために一番重要な要素はトレランス（寛容さ）です。つまり社会的寛容性がどのくらいあるのかということです。このトレランスがないと、それぞれの部品がギシギシいってなかなかかみ合わないのです。ダイバーシティ（多様性）はトレランスがあって初めて有機的に動いていくので、トレランスの構造をどうつくるのかということに、私などは先ほどの須藤さんのお話をお聞きして、それも1つだなと実感させていただきました。

最後の眼鏡のお話は非常に素敵な例で、私も老眼で眼鏡をかけていますが、これはドイツの眼鏡で、たったの2,000円です。しかも0.5ポイントずつ刻まれています。昔は鼈甲づくりで10万円もする眼鏡でしたが、今はしょっちゅう失くすこともあり、どこでも付けられるように10個くらいを持っています。これはとても分かりやすいトレンドで、トレランスと、すべてをポジティブに考えて、そこから新しい何かをクリエイトするというご提案だったと思います。非常に面白くお話を伺えました。皆さんもご質問等ありましたら、どうぞお願いします。

（平尾委員）

3月にひどい腰痛で車いす生活となり、大変つらく、車いすには2度と乗りたくないという経験をいたしました。先ほどの須藤さんのお話を伺って、車いすがこういう形に変わるというのはまさにイノベーションで、腰痛などで歩行困難な人たちに対しての協力、“May I help you?”という気持ちも大切ですが、イノベーションで解決していくという発想、取組は素晴らしいと思いました。

イノベーションのベースとなる産業的な基盤である、部品、センサー、モーターなどのツールは、全て川崎市にあります。障害者の福祉を向上するというに加えて、それがまた川崎に新しい産業を作り出すというモーメンタム（推進力）になるというお話に、非常に感激いたしました。

また、先ほど涌井先生がおっしゃったように、川崎市がこれから目指す方向としては、クリエイティブシティ、知的創造都市ということだと思います。都市社会学者のリチャードフロリダが、4年ほど前に書いたクリエイティブシティの中で、ダイバーシティという言葉が、クリエイティブシティが成長する条件のキーワードとなっています。いろいろなダイバーシティを彼は言ったのですが、言うだけでなく、そのベースとなる社会的、技術的、産業的なインフラをつくっていくのですが、その可能性が川崎市にもあることを感じました。

問題は資料2にある3つの方向性、①Diversity（多様性）の実現②City Capital（地域の資産）の向上③Civic Pride（市民の誇り）を持つ、ピープルデザインが極めてマッチしているということです。ここに書かれているいろいろな事業展開を具体的にどういったアクションプランで、市としてピープルデザインと協力して展開していくかという方向付けが、今日のお話を伺ってかなり見えたように思いました。

（秋山委員）

お話を伺って感激いたしました。意識のバリアフリー化に取り組んでいく上で、障害者がカッコよくなって社会にどんどん出ていくということが大事なのだと思いました。そして、その人をカッコいいと思うかどうかは、マーケティングやPRというような分野で、私たちはいろいろ刷

りこまれているような部分があると思うのですが、強いメーカーは強い発信力がありますし、産業界がそこに入ってくるということと、トレンドを作って発信していく人たちが入ってくることで、意識をじわじわと変えていけるのではないかと思います。大学を含め、多方面でやらなければいけないこと、やれることがあると思います。川崎市でしたら、1つはこの福祉産業がありますが、産業界や教育界など各分野に対しての役割や要望がありましたら、須藤先生にお伺いしたいのですが。

(須藤ゲストアドバイザー)

ここにこうして欲しいという思いはたくさんありますが、一方で受ける側の立場からしてみますと、いろいろなところから要望を受けていると思います。言い方を変えますと、私たちであれば何ができるかという考え方をしています。

たとえば、先生方からいろいろなお話を伺って、私たちに考えてこうだというようなイメージに変えさせていただくと、技術は既にあり、ものをつくっている方がいらっしゃいます。ただ、それはものづくりという視点で、それぞれの枠の中で考えておられるのです。あるいは、それを持ち寄るような、今までの福祉機器展などの展示会を何度か拝見したところ、従来の枠の中からはなかなか出ない。もしかすると、ご経験や成功体験が長ければ長いほど、枠を出ることに恐れがあり、新たな我々の視点を下げていくような状況が、福祉従事者に散見されています。

その中で、私たちは慶應義塾大学のメディア研究デザイン科が立ち上げた、超人スポーツ委員会にご一緒しています。たとえばパラリンピアンソールのソール、義足、義手は、現在の技術では電動モーターを付けると時速30kmぐらい出ます。SF映画の主人公の世界です。バック・トゥ・ザ・フューチャーのフーバーボートも実現しましたが、そういった技術があるのです。そこで私たちは新しいエンターテイメントとしてのスポーツをゼロからつくろうと準備しています。

また、他方、前回の超福祉展でご協力いただいた、義足の開発者であるソニーコンピューターサイエンス研究所の遠藤謙さんが、為末さんと一緒にパラリンピアン育成に取り組んでいます。義足の強度は遠藤謙さんの専門性をもって補い、機能を知らせる役割として為末さんの商業性を活用し、パラリンピアンを前面に出していこうと考えています。

これは川崎市にご相談中なのですが、選手は練習場に苦慮しているようです。選手は全国に散っており、それぞれで練習場所を探しているということです。これは私の提案ですが、等々力競技場を月1日なり2日、土日のどちらかを、全国のパラリンピアンを支援するというので、えこひいきしてオリジナルの練習日を用意し、現在のアスリートたるパラリンピアンを誘致してはどうかと思います。また、ここで言う超人スポーツの技術機器の市場実査のようなことを、時間を分けてその場で展開し、すなわちパラリンピアンという身体的な障害をきっかけに開発されたハンディを補う目線がいかによりテクノロジーとしてイノベートしていくのか。その総本山として等々力競技場を提示するというので、少なくともKMD（慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科）の先にある研究者やアクシブというモーターを使わない歩行補助装置の開発者が試す場所として、等々力競技場を位置付けたらどうかと考えています。既存の国内にあるNEC、富士通をはじめ、様々な技術を持った町工場の持っている技術を持ち寄っていただくような、テレビ番組のロボットコンテストに近い要素もあるのですが、それがリアルなパラリンピアンスポーツになるのだと思います。そこに川崎市で言えば法政二高の選手のような、トップアスリートを目

指していく次世代たちが、時間を超えてフィールドで共存し、それを市民が観客として楽しむ構造をつくるなど、従来の福祉とはまったく逆の、見てワクワクするような観客の立場でのスポーツというように考えた時、パラリンピアンの方々の練習場として、エキサイティングなものになるのではないかと思います。来年3月あたりからえこひいきのワンデーをつくっていただけないかを相談中です。市民の皆さんの意見がどうなのかという現実問題はあるのですが、にこやかにやりましょうよと提案すれば、意外に良い方向に行くのではないかという気もしています。

(唐仁原都市経営部長)

今お話されたような形にならないか調整をしています。1月からは、既存の団体もありますので、その中に入って一緒に練習していただこうかと考えています。

(須藤ゲストアドバイザー)

先ほどの、車いすを体験されて、できればもう乗りたくないという印象を持たれたお気持ちは、私も家族が一時車いすを使っていたのでよくわかります。先日超福祉展で車いすやセグウェイに乗っていたのは、きゅーぱみゅぱみゅと同じ事務所の双子のモデルです。「クリスマス、くるまいす、これがいい ピース」みたいな感じで、真面目な福祉事務所の方からお叱りを受けるのではないと思うくらい、ニコニコして車いすに乗って闊歩していました。子どもたちが集まってこれに乗りたいたいと言い出すほどで、おおよそ車いすイコールかわいそうと感じるスティグマはありません。秋山先生がおっしゃっていた、どうプロモートするかというところにおいては、開催実行の事実があり、そこで一般のメディアを通じて全国に告知していただくことが、伝播・伝達の近道かもしれないと思っています。

(座長)

なぜ白物家電のメーカーが衰退していったのかと言いますと、技術的な要素へとどんどん進出し、ライフスタイルのクリエイイトが失われたためです。ソニーはウォークマンにはじまり、スティーブ・ジョブズにより座って叩いて打つコンピューターが、触ってめくるものになり、フリーハンドになりました。これはライフスタイルクリエーションです。要素はすべて既成品です。

今、日本の産業界に一番足りないのはライフスタイルクリエーションで、次の世代のライフスタイルに関する研究が遅れています。マーケットは発展途上国に集約してしまい、先進国にはイノベーションが希薄なため、プロモーションが波及しにくい状況に陥っています。先進国にはモノが行き渡っているため、何が必要かと言いますと、必要でないものが、つまり感性価値に訴えかけてくるものが必要なのです。その感性価値をリードするものというのは、地球環境問題、健康、福祉で、それらに対するモーメンタムです。

私がよく言うのは、愛情と情熱と誠実の三つ葉のクローバーに加え、夢と希望が必要だということです。空を飛ばたいから飛行機ができたというように、そこに新しいクリエーションの種があり、それを行政がどう育てていくかと言いますと、それは平尾先生が今まで一生懸命やってこられたわけです。そこにもう1つ、感性価値を加えたライフスタイルクリエーションをどうするのかと考えますと、今のお話は大変魅力的です。

しかし、それだけではなく、高齢者マーケットを最終的に見極め、まずは障害者の様々な事例に着目した産業集積をしながら、結果として高齢者に汎用化されるというようなゲームを組み立ての一環としてこれからスタートする。そうであれば、非常に川崎として夢が持てますし、部局

を超えてと言っても総合企画局にしかできないと思います。いかに複合多機能にするかがとても大事で、これが行政に欠けているところだと思います。結果としてペンタゴンではなく、先のどんがりごとれ丸くなってしまうのが一番よくありません。

(市長)

都市経営部長の調整中というのを聞いて、これはいかなんと思いました。他局と調整をすると、既存のところちょっと不足程度になってしまいますので、もう少し上から網をかぶせて、こういうスキームでいこうというような考え方でいかないといけません。

(座長)

政策の複合化を福祉の議論だけで留めていたら、イベントをやり、それで終わってしまいます。川崎市の産業シーズをどうツール化して、どうシステム化するか、そのためのモチベーションとしてどういったライフスタイルクリエーションをするのが大事なのではないのでしょうか。

(平尾委員)

資料2の推進体制等ですが、そこに庁内推進体制の確立とあり、各関連局長など市の組織を全部入れています。③新たな総合計画等での検討に様々な計画づくりにおける方向性の検討とありますが、方向性の検討というのは、霞が関用語で言いますと、やるという方向ですがアクションプランではありません。川崎市役所では分かりませんが、方向性ではインパクトが弱いという気がします。もう少し推進体制についてベクトルを強化する必要があると思います。

(出石委員)

その点は行財政改革と同じで、結局、部局間の調整になると何もできないのです。総合計画も方向性という話になると、方向性を検討するなど言ったりもします。はっきり言って、やはりトップダウンでなければ進まないと思います。

感銘を受けるお話がたくさん出てきたのですが、一番印象に残ったのは、席を譲りたいけどもじもじ感というあたりです。それから、ノーマライゼーションというのは、マイナスからゼロにするのではなく、皆同じ出発点であり、ゼロからプラスにするというお話です。

混ざり合う世界というお話で、ちょっと別の話になりますが、ブラインドサッカーのキーパーは健常者ですが、視覚障害の程度があるので全員目隠しをしていて、同じ土俵で皆が助け合っているということです。現実にあるスポーツとしてこれはすごいなと思いました。

(須藤ゲストアドバイザー)

ブラインドサッカー連盟とは6年越しのお付き合いです。3月8日、啓蒙活動を6年弱展開しています。ブラインドサッカー協会とタイアップして、小学校教育の現場に、スポーツ教育、スポ育と称して、彼らが展開しているユニークな活動があります。人権の授業によくあります、車いすに乗ってどれだけ大変か、できれば乗りたくないというような、従来のスティグマが行き渡る取組ではなく、全員が視覚を閉ざした時に、もう1回、友の名を呼ぶコミュニケーションを誘発するような企画として、スポ育を全国300か所くらいで展開しています。その企画等を私たちも数年前から参加させていただいています。

今話に出たアイマスクもオフィシャルなものをつくっています。これは企業の人材育成研修にも取り入れられており、チームビルディングと言って、文字通り昔は廊下を挟んで向こう側の仲間と大声でやりとりしていたのが、現在はすべてメールになってしまっていますので、あえて五

感の1つを閉ざして、もう一度他者との人的なコミュニケーション能力を喚起しようというようなステージで、ブラインドサッカーを活用させていただいています。

(出石委員)

キーワードの1つは若者かという気がします。格好いい、欲しい、乗ってみたいというのも、若い世代が違和感なく参加でき、障害者と一緒になっているというお話も先ほどありました。

(須藤ゲストアドバイザー)

どこにフォーカスし、どこに対して伝えていくかの想定としては、これから父となり、母となる次世代は重要だと思います。

(座長)

昨日、明治大学の600人程度集まる会議で、東京オリンピックは開催すればよいというものではないという話になりました。1940年、満州事変が拡大する中で東京での開催が決まっていたものの軍部が返上させ中止、そして1964年の開催、そして今回で、日本は2.5回目のオリンピック開催になります。ロンドンの3回に次いで2位になります。本来であればGDPが一定の金額になった時に中進国から先進国にキャッチアップする時の手段がオリンピックであり、それが安定すると万国博を開催するというのが定石でした。そういう意味では、本来ならば今回の開催地はイスタンブールが一番望ましかったのです。中東、ヨーロッパ、アジアの交点にあり、地勢学的にも重要な場所ですから、そこでの開催を世界が応援することが正義だと考えています。それを日本が奪った以上、I O C憲章第1章第2項にあるオリンピックレガシーに焦点を絞るべきだと思います。

つまり、スポーツレガシー、アーバンレガシー、エンバイロメントレガシー、エコノミックレガシー、ユニバーサルレガシーです。I O Cの規定では「開催都市ならびに国家は、世界に対して開催後、明らかにポジティブな影響をもたらすであろうと思われる遺産(レガシー)を残さねばならない」とあるのですが、皆これを忘れ、開催できさえすればよいという間違った風潮があります。だから私はビヨンド2020、2020年は通過点だと言っているのです。先進国の日本が発展途上国からオリンピックを奪った責任を世界に果たすには、オリンピックレガシーをいかに充足していくかが重要なテーマになると思います。この点で、川崎が東京オリンピックをどう支えるのか、さらに戦略的に言えば、羽田空港に対して川崎がどのような役割を果たすのかを考えた時に、パラリンピック側、つまり弱者の立場にたって、弱者が弱者でないような魅力あるまちづくりにウエイトをかけ、福祉領域だけでなく総合的な産業政策で対応すると言えば、かっこいいと思います。

(市長)

おっしゃるとおりだと思います。対外的には公になっていないかもしれませんが、実は2020年の開催で川崎がウエイトを置いているのはパラリンピックなのです。

(座長)

平尾先生も、先ほど総合計画での方向性のところでお話になっていらっしゃいますが、そのコンテキスト(文脈)をどうするかだと思います。

(市長)

6年後のオリンピックと、川崎市制100周年の時にどのような社会をつくっていくかだと思います。

ます。森ビルが、バーティカルガーデンシティという大きな構想をもっています。地上は高層ビルで周囲は緑地、地下は文化都市をつくるというものなのですが、一目で、この会社はこういうまち、ビルをつくりたいのだということが1枚の絵で誰にでもわかりやすいのです。同じように、総合計画も誰が見てもわかるようにしておくのが理想だと思います。涌井先生がおっしゃったライフスタイルクリエーションについても、どのようなライフスタイルになるのかという未来図を見せ、そこにピープルデザインの考え方を散りばめることで、自分たちの目指す姿が市民に浸透すると思います。海外の方が見てすごいと感じるような、世界に誇れる取組み、心のバリアフリー、そういったものを総合計画で示す必要があると思います。今日のキーワードはライフスタイルクリエーションだと思います。

(須藤ゲストアドバイザー)

市長を座長にピープルデザイン推進というゆるやかな組織体を構築していただいています。健康福祉局が各部局の接点となる領域が多いのですが、これを横につなげることができれば、10たす10が30くらいになる程度によくなる可能性を強く感じているのですが、具体的なブレークスルー策はあるのでしょうか。

(市長)

来年、オリンピック・パラリンピックへの対応をまとまった形で発表する時に、大きな絵が描ければと思っており、そこで、いろいろな部局が何をすることがわかってくると思います。大きな絵がない中で個々に動いてしまうと、自分たちがどこに進んでいるのかが見えなくなってしまうと思いますので、早いうちに絵をつくろうと思います。その1つのきっかけがオリンピック・パラリンピックに向けた取組だと考えています。

(平尾委員)

資料2の2枚目の推進スケジュールにおいて、中期を「2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた取組」、長期を「2024年川崎市制100周年に向けた取組」としています。どの総合計画にも東京オリンピックへの対応と書かれているものの、具体的に川崎市として何をすることで市の発展・展開につなげていくのかがわかりませんでした。これが具体的になれば、市としての取組の位置づけがはっきりするのではないのでしょうか。ライフイノベーションも含めて、新しいオリンピックレガシーを川崎としてつくっていくという部分で、ピープルデザインの考えと市がマッチングすればすばらしいと思います。

(市長)

総合計画の大きな枠が10年になりますので、ちょうど100周年に向けての話になるのですが、その1つのメルクマールが2020年ということだと思います。そこでどのような大きな絵を描き、具体的にしていくかだと思います。

(座長)

2020年は非常にエポック（画期的な時代）だと思います。なぜならば、まず、地下資源の可採量がピークアウトするのが2020年から2050年だからです。シェールガスはパイ生地から残った蜜を吸っているようなもので、エネルギー価格が高騰しているために現状の価格帯でも採算が合っているのですが、LNGなどで大量に別のものが入ってしまうと途端にダメになってしまいます。今度のCOP20ではっきり打ち出されると思いますが、地球温暖化について、CO₂濃度の限界

値の方向性が出るのも 2020 年で、ティッピングポイント（それ以降、急激に変化する点）としてのプラス2度のラインを超えてしまうかもしれません。また、地球人口も想定以上に伸びて 100 億人に近づくかもしれず、食糧や水のような一定の資源量しかないものをめぐって争奪戦になり、不安定になる可能性があります。スピリチュアルな世界に逃げ道を探すことで、ラディカルな宗教がかなり出てくるかもしれません。不安定になることでテロが多発する可能性もあります。本当ならばオリンピックがどうのといっている場合ではないのです。同じ頃、川崎市も財政の弾力性が下降局面に入っていると思われます。行政の役割は、いわば興行主である日本相撲協会から行司に代わっている可能性もあり、ピープルパワーをどれだけ前面に出し市民にやる気を出してもらうかが問われるかもしれません。

加齢と老化は違って、加齢しても老化しないということがあり得ます。老化はモチベーションと環境と日常生活習慣で変わってくるのです。しかし、今の福祉政策には負担と給付の議論しかなく、元気な高齢者をつくる話になっていないのです。愛知万博のプロデューサーをしたのですが、12 万人以上集まったボランティアの中で、62 歳以上が 20 数パーセントいました。その出身は長久手町と豊田市と瀬戸市でした。185 日間はその地域の医療費は半減したはずですが、家でじっとしているとあちこち痛いと感じて病院に行きますが、人の役に立っていると忘れてしまうのです。本当に必要な医療費よりずっと上げ底になっているということです。

ネガティブなものをどうポジティブに転換するか、あらゆる場面でどのように参画形態をつくっていくかだと思います。トレランス（寛容性）がとても重要な要素であり、それが高まればいろいろな参与の仕方が出てくるのです。昔は横断歩道に緑のおばさんが立っていて、皆、元気でしたが、それは人の役に立っていたからです。そういう方向に転換するための1つのムーブメントが東京オリンピック・パラリンピックであり、それらの感動とシナジー（相乗作用）して川崎市がやってきたことが正しかったと確認できれば素敵だと思います。むしろオリンピックを食ってしまうくらいでも結構だと思います。

（垣内委員）

文化を専門にしているのでピープルデザインに惹かれます。オリンピックはスポーツが脚光を浴びがちですが、実はスポーツと文化の結婚（マリアージュ）と言われています。アーティストは昔、江戸時代には、許可された時期に許可された場所で劇場が開かれる低い身分だったのですが、現在は社会的認知度が高まっています。社会的に区別をされがちな人を研究対象としているので共感を持つところが大きいです。

国勢調査によると、自称アーティスト人口は 50 万人超とのことで、1 番伸びているのはデザイナーのようです。どの業界、企業からも引っ張りだこのようです。文筆業や音楽業、画家は下がり気味で人口が減少しています。デザイナーは今後も重要な職種だと思います。

数年前、骨折して1週間ほど車いす生活を送ったことがあるのですが、車いす生活は楽でした。機能やデザインがもっと優れていればという気持ちもあったのですが、今活動されているものを見て感銘を受けました。これなら私はすぐに車いすに乗ると思います。モビリティに関心をもったのは、高齢化社会を見据えるとインフラが不便で移動が難しいからです。支援してくれる人がいない時もあるので、移動できるデバイスがあるといろいろな場所にでかけることができ、ハピネスが高まるという意味で大きなポテンシャルがあると思います。自分の肉体的・知的能力は時

期などにより変動するとは思いますが、能力を活かして生活できる社会の実現は重要で、高齢化社会の今こそ、必要とされていると思います。

これまでの、大量に安価なものをつくっていく量的充足社会から、QOL（生活の質）を上げていくような産業形態に移行する時期に来ていると思うからです。車いすによるパーソナルモビリティに関心があり、フランスの研究者の希望でトヨタの工場を見学したことがあります。トヨタでは将来的にこのようなものをつくろうというモデルをつくっていました。使わない時は立てられる仕様で、自転車にモーターとコンピューターがセットされ、誰でも使え、省エネで省スペースなのです。立てた状態でも、座るセグウェイのようにゆっくりと動くことが可能なものでした。フランスの研究者はとても喜んで使いたがり、パリで売り出す時期をしつこく聞いていました。

先ほどお話いただいたのは主に福祉分野でのご活動についてですが、パラダイムシフト（ある時代を牽引する考え方の革命的な変化）は福祉の領域を超え、いろいろな可能性があると思います。デザインと産業をうまく結びつけて成功事例を提供していくことが、多くの方にアイデアを理解していただくためには大事だと思います。マーケットに出て経済的価値を生むことが明らかになれば、いろいろな方が賛同していくと思います。このあたりの戦略があれば教えていただきたいと思います。その際、企業が立地する基礎自治体に期待することは何でしょうか。おそらく、産業政策において行政に期待できることはルールづくりや条件整備などかと思うのですが、どんなことをしてもらえれば進展しそうなのでしょうか。

（須藤ゲストアドバイザー）

私は福祉だけとは考えておらず、ゴールはダイバーシティの実現と考えています。ごみを分別したり、歩きたばこやポイ捨てをしなくなったりしていますが、考えてみるとある日突然そうになっていた気がするのです。エコやマナーなどは常識としてあったものの、生活の中で皆がやり始めたのはある日突然であった気がします。生活習慣も含め、文化というのは人々の行動規範を事後に振り返って総括した時に出てくるものだと思っています。ダイバーシティのゴールに至らしめる時に、心のバリアをフリーにすることがタスクとしてあると思います。福祉領域のみならず、経済産業力をどう上げていくかも大切だと思います。

具体的には、私たちの資本力、組織力は限られますので、こういった機会を通じてご期待いただける場面があればその領域で、皆さんのお力をお借りしつつ、皆さんの背景にある企業や学術研究者の方々などをご提供いただきながら、例えば「川崎市の未来づくり」といったテーマで目に見える形で供給いただければありがたいです。

企画の中のウイルという電動車いすは日産の20代の技術者たちが開発しました。開発当初は、自動車業界に提案しても、どこもゴーサインを出してくれなかったそうです。3回ほど前の東京モーターショーにデモ機が展示されていましたが、宇宙の乗り物のように感じた記憶があります。結局、技術者たちはシリコンバレーまで進出してプレゼンし、数百億の原資を集めて逆上陸を果たしました。例えば黒電話→プッシュフォン→ファックスつきコードレスと考えていく方向性より、ある日突然、端末からiPhoneがボンと出現するようなアプローチが必要です。

（座長）

トヨタは三河武士なのでやれることしか言わないのです。しかし、やれると言ったらやります。

多くのツールを磨いていて、プロモーションしないだけで、並行して進行した中から出てくるのです。ハイブリッドから電気自動車にいなかったのは水素自動車があったからで、そこには戦略があるのです。

垣内先生がおっしゃったことは非常に重要なことで、トレランスの条件をつくるのはサブカルチャーへの理解、文化的理解が重要になるのです。渋谷に“やまんば”が出没した時に、これはパリコレに出ると予測しインタビューしたことがあるのですが、案の定、2年後にはパリコレに出ました。江戸時代が明治維新をキャッチアップできたのは、サブカルチャーの世界があったからです。平賀源内は医療機器を売りたいくてエレキテルを発明したのではなく、単にびりびりしたかったのです。先ほどスポーツと文化のマリアージュがオリンピックとおっしゃいましたが、これからの産業はサブカルチャーとテクニックのマリアージュであり、感性価値をどうリードするかで決まってくると思います。

(須藤ゲストアドバイザー)

ハットするようなデザインやカルチャー、機器は、同時に優れたコミュニケーションを生むと思います。

(座長)

テレビで渋谷のハロウィンのお祭り騒ぎを見て実際に出かけたところ、最初は何をばか騒ぎしているのかと思ったのですが、次第に、あんな風に自己表現することに感心してきました。次のソースになると思いました。どちらの目線で見るとかということです。学生のピアスを、眉をひそめて見るか、頑張っているなど見るかです。川崎にはダサいサブカルチャーはたくさんあるので、その中から上質なサブカルチャーにどう転換していくかが大事だと思います。

(須藤ゲストアドバイザー)

森ビルの絵のお話のように、見える、近い憧れる未来を、かつての iPhone のように提示することで、そこに吸引されるように皆が向かっていくことが、現実的な考え方の入り口のような気がします。

(市長)

パラダイムシフトのお話がありましたが、須藤さんのお話を聞いていると、シフトではなくパラダイムスイッチのような気がします。表からしか見ていなかったものを裏から見るとどうなるのかというくらいの転換です。段階を追って進化するよりも黒電話からいきなり iPhone という展開のほうが入りやすいものがあると思います。福祉は歴史があるのでそこからシフトするのはとても大変だと思うのです。むしろパラダイムをスイッチしたほうがよいと思うのです。

(座長)

残り 10 分となり、進行予定では川崎はどう考えているのかについてお話があるとのことでしたが、先ほど A 3 資料でかなりの議論をしましたので、敢えてフリートークにしたのですが、せっかくですので何かお話をください。

(袖山自治推進部長)

日本の社会経済環境の中で地域の課題が複雑になっており、行政が何でもできる時代から、解決に地域の力が必要な時代になってきたと思います。自治推進部は多様な主体との連携の窓口業務を行っているのですが、これまで企業や大学がそれぞれ地域とともに取り組んできたものを、

川崎市とともに行うことで連携・協力の協定を結ぶかたちで関わるようになりました。最近、他の自治体にも広がり、横浜市や大田区、宮崎県とも協定を締結しています。NPOとも地域の主体の1つとして協定を締結しています。ピープルデザインとも協定を締結し、互いの考えや知識等を持ち寄り取り組んできました。障害者だけでなく、外国人やセクシャルマイノリティなども関わってくると思います。ピープルデザインの考え方は障害者の就職支援だけでなく、様々な要素があり、川崎市でご用意できる領域も多岐にわたっていると思っています。各部局のものを出し合いながらやっていくというところがあり、総合企画局、今の自治推進部で担当しています。資料2は市長が座長を務めています庁内推進本部で決定した川崎市のダイバーシティのまちづくり推進の基本方針に相当するものです。スケジュールは、担当部局で予算と業務の中で話をしていたものを掲載したもので、今後の取組の検討中というところもあり、川崎市の産業については相手方の問題もあり、方向性は出ているのですがまだ具体化していません。人づくりについては、資料には掲載しておりませんが、川崎市では400人以上の職員が、須藤さんから直接話を聞いている状況ですので、理解する職員が増え、事業展開も、トップダウンという話もありましたが、幹部職員から少しずつ広がってくるのではないかと思います。

(座長)

ありがとうございます。定刻になりますので事務局にお返しします。

3 その他（次回会議等の開催等）

(事務局)

ありがとうございました。資料3をご覧ください。来年2月1日に第2回の有識者会議を開催する予定です。社会福祉、子育て、教育ということで、これまでのラウンドテーブルでの議論も含めて総括的な議論を行う予定であります。説明は以上でございます。

(座長)

最後に、市長よりお願いいたします。

(福田市長)

本当にありがとうございました。心のバリアフリーもそうですが、意識を変えていくのは非常に難しいものです。ただ考えているだけでは意識は変わらないため、アクションを起こすことにより人間の意識は変わっていくのだと思います。7月に協定を締結してから、早速いろいろな取組をしてくださり、この間に8回開催していただいています。行政も体系立てて、どのような社会を目指すのかという大きなピクチャーの中で、具体的なアクションを一緒につくり出す必要があると思います。ダイバーシティのまちづくりをしっかりと議論し、今日いただいた大切なご意見を活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

(事務局)

本日のラウンドテーブルもありがとうございました。閉会いたします。

以 上